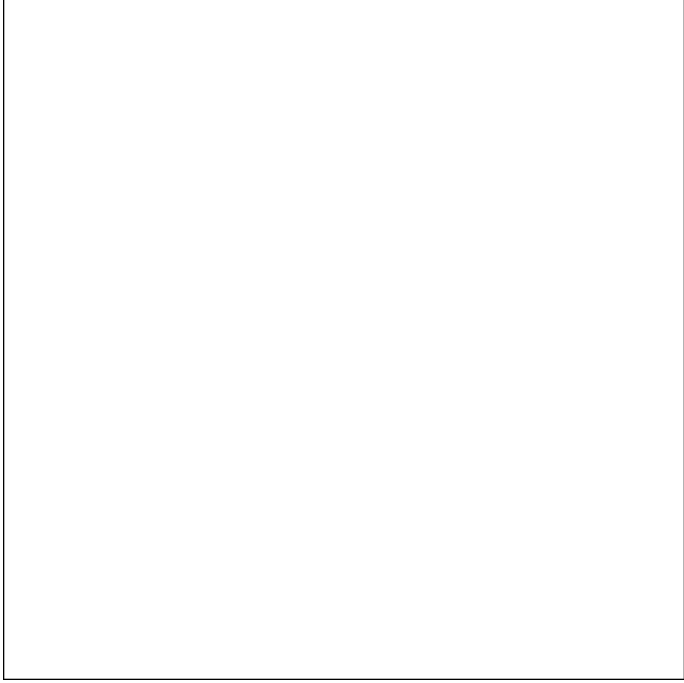


カバに毛がない訳



✎ Basilio Gimo, David Ker
☑ Carol Liddiment
📄 Sayuri Hayashi
🗨️ 日本語
🇯🇵



Global Storybooks

globalstorybooks.net

カバに毛がない訳

✎ Basilio Gimo, David Ker
☑ Carol Liddiment
📄 Sayuri Hayashi



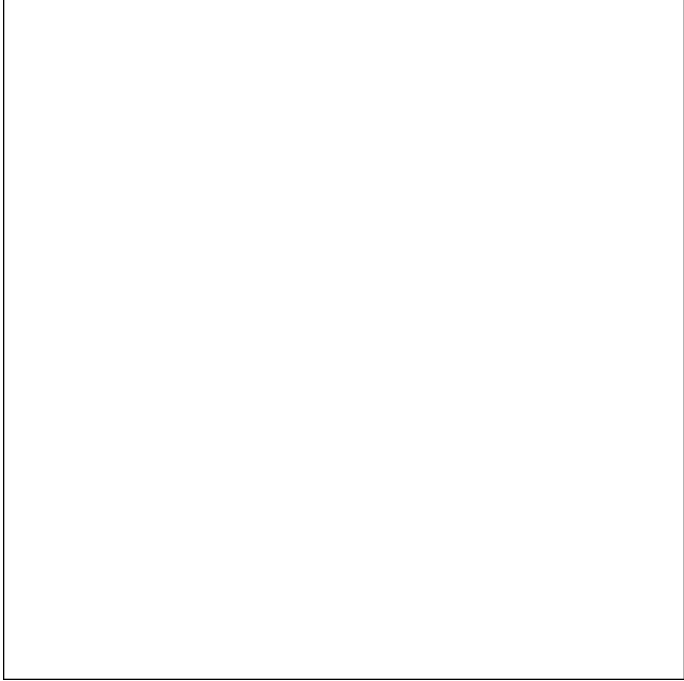
This work is licensed under a Creative Commons
[Attribution 3.0 International License](https://creativecommons.org/licenses/by/3.0).
<https://creativecommons.org/licenses/by/3.0>





ある日、うさぎが川のほとりを
歩いていました。

カバもそこで散歩をしながら、
すてきな緑の草を食べてしまし
た。



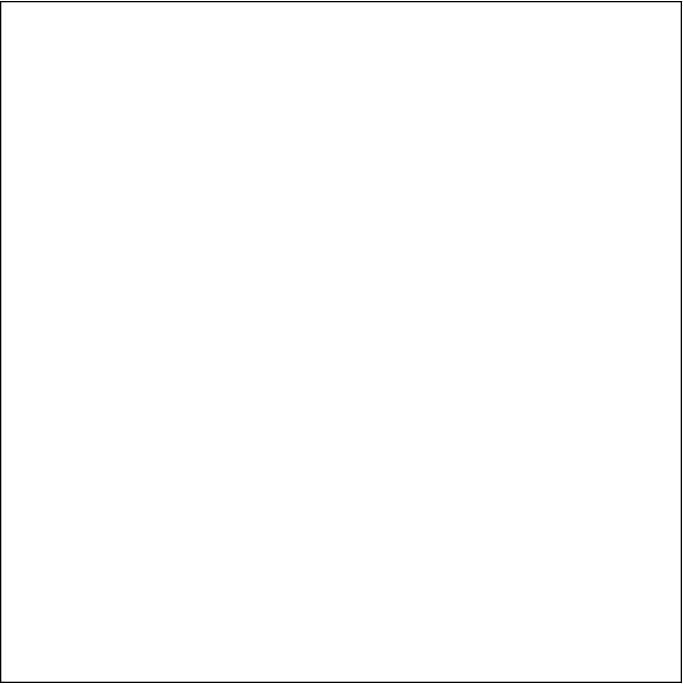


カバは、うさぎがそこにいるとは知らず、あやまってうさぎの足を踏んでしまいました。うさぎはカバを見つめてそして叫びました。「おいカバ、わたしの足を踏んでいるのが分からないのか？」

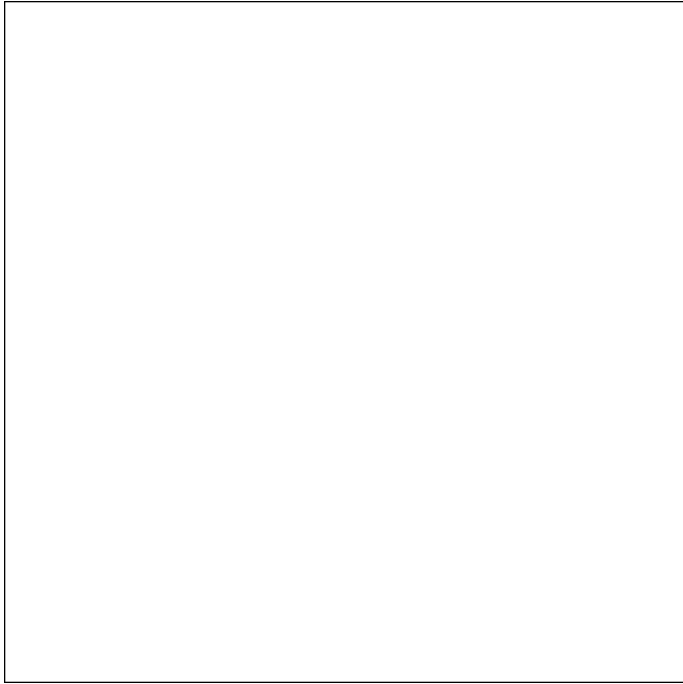


うさぎは、カバの毛が燃やされて、嬉しくなりました。そして、カバはこの日を機に火を恐れて、水から離れたところには二度と行かなくなりました。

カバは、うさぎに謝りました。「ごめんよ。見えなかったんだ。どうか許してよ」けれどもうさぎは聞き入れず、カバに向かって叫びました。「わざとやっただろ！今に分かるさ。ただじやすまないぞ！」

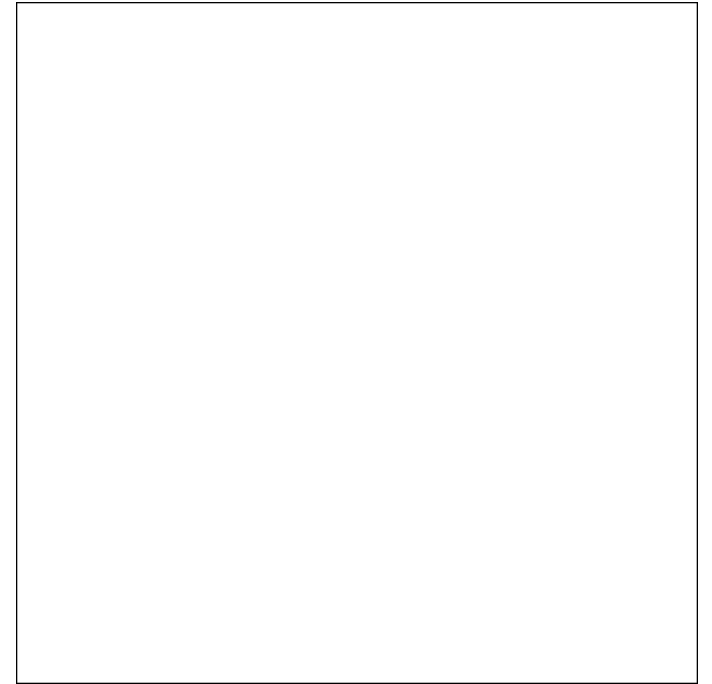


カバは泣き出し、水を求めて走りました。カバの毛は全部火によって燃やされてなくなりました。カバは泣き続けました。「わたしの毛が火で燃えた！わたしの毛はすっかりなくなっちゃった。わたしの美しい毛が！」





うさぎは火を探しに行き、こう言いました。「行け! 草を食べるために水から出てきた時、カバを燃やしてしまえ。やつは、わたしの足を踏んだんだ!」火は「お安い御用です。友達のうさぎさん。お望み通りにやりますよ」と答えました。



その後、カバが川から遠く離れた場所で、草を食べていると「ビュン!」火がつき炎が上がりました。炎はカバの毛を燃やし始めました。